

社会教育主事・社会教育士養成の改善・充実に関する  
ワーキング・グループ（第7回）における主な意見等

第7回養成WGでは、今後の養成課程の在り方等を中心に検討し、報告書案全体について意見交換を行った。

## ○養成課程に関して

### <概要>

- ・養成課程の見直しの方向性に係る試案について検討を行った。試案では、今後、学生が卒業後に社会教育士として多様な場で即戦力となって活躍できるよう、実践と省察を重視し、地域社会での実践力の向上を図ること、社会教育士として最低限必要な資質能力が確実に育成されるものとするため、単位の実質化や科目間の関連性を重視するとともに教職課程との連携・併修の促進等により社会教育士養成の質の向上と拡充を図るとした。
- ・具体的な見直しの内容として、社会教育実習や演習の充実、社会教育特講の見直しを図ることとし、以下の2つの試案について検討を行った。

（案1）幅広い地域課題について共通の知識を得る新たな「社会教育特講」（4単位）への見直し及び実習の充実（1単位から2単位へ）

（案2）「社会教育総合実践演習」（2単位）の新設と実習の充実（1単位から2単位へ）、  
「社会教育特講」は現行と同じ選択科目（8単位から4単位へ）

### <委員意見>

#### （全体）

- ・（資料1の）社会教育士の養成をメインとするという観点は、見ようによっては、今後養成課程では社会教育主事養成をしない、社会教育士だけを育成するかのように見えてしまう。講習では社会教育主事と社会教育士の両輪で進めるという決着をしたので、ここまでするかは議論が必要である。
- ・「社会に開かれた養成課程」とは、地域人材を外部講師として招くという趣旨ではなく、地域コミュニティの基盤となる社会教育という、社会教育部会が示す方向性に符号し、そこに養成課程の目的を置くこと、導入的講習やフォローアップも含めた全体の中で講習を位置付けるという、講習改革の方向性と連動し、養成課程も長期スパンで見て社会全体で人を育てるという方向性に位置づけること、実践と省察の往還や教育的アプローチの重視といった教育内容も含めた、改革の方向性を示すものである。
- ・「地域に開かれた養成課程」より「社会に開かれた養成課程」というほうが、より幅広い意味を持つと思う。単純に地域の課題解決を学ぶ、地域人材が養成課程で講師をするという話ではなく、養成課程を通じて社会に関わり、その経験が直接本業にはならなくても、

社会教育を学んだ学生が、いずれ地域の住民として、また関わり直す学びになっていく可能性を込めて、より幅広い意味で使っていくべきと思う。

- ・社会教育実習に来た学生が、実習後も地元の社会教育の中で活躍していたり、地域づくりの活動に参加していたりと、社会教育の若手の担い手になっていると聞く。また、高校の総合的探究の時間に地域課題や地域活性化について学んでいる生徒が多くなってきており、これら学校の中での学びは社会教育の特質を強くもっている。そこで学んだ経験を活かし、大学進学後もより深く学んでいける場として、社会教育主事の養成課程を活用していただくという姿もとても大事である。
- ・養成課程を取った人を卒業後に何かつなぐような形に配慮でき、そこが重要ということが書けると良い。
- ・開かれたというのは、単純に大学での学びだけで養成するというのではなく、地域社会の中でも活動することによって、さらに専門性が高まっていく、往還の話と同じ文脈として、「地域に開かれた」という言葉が少し補足されるとよい。
- ・社会教育課程なのに概論が生涯学習概論なのは違和感がある。
- ・養成課程は、社会教育主事を養成するという意味でも非常に重要である。養成課程の見直し、大学の社会教育主事の研究や人材の養成の充実につながるのが一番良い。各大学がより一層養成課程を進めていこうと思うような、大学の学生が、より社会教育養成課程を受けてみたい、学んでみたいと思うような改正になると良い。

#### (社会教育総合実践演習(案2)について)

- ・社会教育総合実践演習は良いと思う。教育実践演習が導入された際、教職課程の最後に、実習が終わった大学生たちと4年間の学びの何を振り返り、どんな知の統合を促していかねばならないのかということ(大学の)同僚たちと議論した。社会教育の養成課程を担う先生方が、いま一度実践と省察の往還を考えていく上で、社会教育総合実践演習という授業科目は1つの方向性を示すものとして位置づけられるのではないかと。
- ・社会教育主事養成課程が多様で、一律では捉えられないということは、大学教育の自由度であると思う。特講の内容を詰め詰めに設定して、縛りを示すより、社会教育総合実践演習の中でどのように実践と省察の往還をし、最終のゴールにたどり着くか、そういうことを考えてもらう機会を提案する改正になるのではないかと。ダイバーシティに関わるものはぜひ含めてほしいが、特講の内容設定を厳密にしすぎると、大学にとっては苦しいのではないかと。
- ・(自身の)大学では演習で卒論を書くなど、やるのがかなりあり、それに重ねて社会教育総合実践演習2単位を必修に入れることは、学生にとって負担感があると思う。教員のマンパワーの点もあるが、学生によっては4年生で短期留学に行くこともあり、後期に設定することの重さを想像する。複数の大学間で科目を設定して春休みなどに集中して履修できる方法があって、社会教育士を目指す人がプラスアルファのようにカウントされ

るという形であればよいと思う。

- ・現在、実習の準備と振り返り、つまりホームルーム的にこれまでのまとめをしながら、事前事後学習を運営するという、総合実践演習に近い内容を課題研究と実習をセットにする形で運営している。そうすると、(案2表中の選択科目2、総合実践演習2は)どちらかの2単位で良いようにも思う。これらの関係性はもう少し吟味しても良いかもしれない。総合実習演習2にして、3、4年次どこでもいいから、ホームルームを行うという指示だけにすると総単位数は減って、追加の部分が少し弱まるかもしれない。
- ・案2は、ホームルーム的な授業を持つことはいいと思うが、2単位必要かというところが疑問である。1単位であれば、秋休みあたりに2日間使って実施する、集中型で実施するなど、工夫ができるように思う。
- ・社会教育実習の実習生を受け入れる側の視点では、実習が、学生にとって非常に重要な学びになることは異論がないところと思う。実践と省察の往還を通じて実践力を高める学びに、養成課程をよりよいものに改革、充実することが今回の1つの目玉になることはまず基本になると思う。
- ・学生が実習を通じて実践力を高める学びを充実させていくと同時に、地域や社会における実習のプロセスの中で、実践の場が若者や学生たちを受け入れていくことによって、よりよい実践を生み出していくという観点はとても重要と思う。1単位よりは2単位以上、一定の時間きちんと実践に関わり切るという観点は重要と思う。
- ・特講を通じて、社会教育を構成する非常に幅広い領域や分野を学んでいく観点そのものはあってよいかと思う。いわゆる地域課題解決のための学習のように、あまり狭くし過ぎないほうが良いかと思う。社会教育特講が幅広い内容を取り扱う、アラカルト的ではあっても、自分の関心分野に応じて学んでいくことは決して課題があることばかりではなく、ポジティブに捉えても良いと思う。それをつなげるための科目としての(案2の)総合実践演習をきちんと検討していくほうが生産的という印象を持っている。
- ・(選択科目の)3単位で、社会教育演習や社会教育課題研究で何をすべきなのか、どんなことをやってほしいと思っているのかということを中心に、明記する改革の仕方でも良いかもしれない。
- ・社会教育総合実践演習を何かに充てることが可能であれば、置けるかもしれない。(科目名として示すかという点について) その場合、実習を実質化することを打ち出すなら、新規で変わることを象徴する科目名を隠す必要はないと思う。

#### (社会教育特講の見直し(案1)について)

- ・案1の方がスムーズと思う。社会教育特講の実質化、実習の充実が良い。実習は振り返りにどれくらいの時間を取るか迷いながら行っていたので、2単位であるとやりやすい。
- ・(案1のように特講の)新設2科目をつくる方が負担は大きく感じる。学生側が4年次にもう1科目増えることに負担はないわけではないが、最後のまとめの授業を中心的な教

員が1コマ行う方が、今の制度からの移行がスムーズと想像する。それをやりながら就職活動をしたり、そこから進路につなげたりするという意味では、4年次に社会教育の科目が1個あるのは、それほどストレスなく入れそうな印象がある。大学によっても違いがあるかもしれない。

- ・案1の場合、ただ地域課題を学ぶだけということであれば、それに意味があるのだろうかと思う。新しい科目をつくるのであれば、相当精査し、必要性を示して、納得できるようなものにしていただきたい。

⇒上記の御議論を踏まえ、概ね案2をベースに検討することとし、事務局にて、社会教育総合実践演習を1～2単位、社会教育実習・社会教育演習・社会教育課題研究（選択科目）を2～3単位として、全体として22単位を確保することとし、社会教育総合実践演習の時期等については、基本的には実習の後を想定するものの、必ずしも4年の後期という固定的な時期ではなく柔軟性を持たせる方向性で案を修正することとした。

#### （報告書案について）

##### ○求められる能力（8ページ）

- ・社会教育士の本質ということと関わっていると、③の「地域コミュニティの維持及び形成をはじめ持続可能な社会の実現に資するものであること」の並びの中に、（社会教育士に求められる専門性について）社会教育特別部会で議論があった「民主主義と住民自治の醸成」という表現も入っていいのではないか。
- ・求められる能力の意味が取りにくくなっている印象があり、個人のレベルとコミュニティのレベルとシステムをつくるレベルに分けて、それぞれの構造で専門性を捉えることが重要だという趣旨が分かる表現のほうがよいのではないか。

##### ○導入的講習（11ページ）

- ・導入的講習についてもう少し議論した方が良いかと思う。社会教育の基礎を学ぶことを位置づけようとしているのか、社会教育の魅力を学ぼうとするのか、導入的講習がどのようなイメージであるかを少し書き込む必要がある。「基礎的な」という表現にしてもいいのではないか。
- ・主事講習の単位数を減らさないで、講習受講の負担が重いので導入的講習を行うという書き方になっている。例えば、地域の人材を支えてきた基盤が大きく変わる必要があり、そのような層を支える上で導入的講習が必要、というようにもう少し積極的に打ち出す書き方に工夫した方が良い。

##### ○フォローアップ研修（13ページ）

- ・社会教育主事講習はエントリーモデルであって、ずっと学び続けるということを書いたほうが良いのではないか。足らないからフォローアップするようなイメージがあるので、「継続教育」という言い方をした方が良く、少し書き換えられると良い。学び続けること

で専門性が担保できるという言い方の方が良いのではないか。

- ・「フォローアップ研修」に対する後ろ向きのイメージはないが、主事講習のこととして書かれており、養成課程を出た学生達とのコラボレーションなど、そこが加わるような工夫を意識していただけるよう、書き加えられると良い。